博学趣味と学識蔑視

― グリンメルスハウゼンにおける ―

松　井　隆　幸

はじめに

バロックの代表的長編小説グリンメルスハウゼンの『ジンプリチシムス』は，知識をめぐる二つの相対立する態度を内包している。過剰とも見える博学への志向とそれと対立する学識一般への蔑視の感情とである。この小説は，主人公の読書体験記として，この両極端の態度に挟まれた知識をめぐる主人公の様々な態度の変遷を描いたものとさえ言いうるものである。以下この点を詳らかにすることをこの論文の課題としたい。

1．神学と医学

小説の冒頭近く，主人公は絶対的な無知者として特徴づけられる。

Aber die Theologiam anbelangend, laβich mich nicht bereden, daβ einer meines Alters damals in der ganzen Christenwelt gewesen sei, der mir darin hätte gleichen mögen, denn ich kennete weder Gott noch Menschen, weder Himmel noch Höll, weder Engel noch Teuful, und wuβte weder Gutes noch Böses zu unterscheiden: Dahero ohnschwer zu gedenken, daβ ich vermittelst solcher Thologiae wie unsere ersten Eltern im Paradies gelebt, die in ihrer Unschlud von Krankheit, Tob und Sterben, weniger von der Auferstehung nichts gewuβt. O edels Leben! (du mögst wohl Eselsleben sagen) in welchem man sich auch nichts um die Medizin bekümmert. Eden auf diesen Schlag kann man mein Erfahrenheit in dem Studio legum und allen andern Künsten und Wissenschaften, soveil in der Welt sind, auch verstehen. Ja ich war so

perfekt und vollkommen in der Unwissenheit, daβ mir unmöglich war zu wissen, daβ ich so gar nichts wuβte. Ich sage noch einmal, o edles Leben, das ich damals führete! (I-1)

しかし神学に関しては，全キリスト教世界において当時私の年頃で私に比肩する者があったとは言わせない。と言うのも私は神も人間も知らず，天国も地獄も知らず，天使も悪魔も知らず，善と悪とを区別することも知らなかった。したがって，そのような神学によって，私たちの最初の祖先が無垢なままに病気も死も亡びも知らず，まして復活について何も知らずに天国で暮らしたように，私が暮らしたということは想像に難くないだろう。ああ，医学について心煩わされることもない高貴なる生活！（あなたはロバのような生活というかもしれないが)。同様にして，法学についての，また世界にありとあるすべての他の技芸と学問についての私の熟達ぶりを納得することが出来るだろう。実際，私は無知という点で完全完璧であって，私が何も知らないということも知ることが出来なかったのである。ああ，当時私は何と高貴なる生活を送っていたことだろう！

主人公がここで知らないこととして特にあげているのは，神学，医学，技芸（ないし芸術）および学問の知識である。これらの知識はやがて小説の展開になかで様々なふうに挿話のうちに描き込まれ，主人公の知識全般に対する態度を特徴づけていることになるのだが，ここでは差し当たり神学と医学の関係について説明しておきたい。

神学にとって人間の魂の救済が問題であるとすれば，医学にとっては人間の肉体の治癒が課題とされる。救済されるべき魂のあり方は，神を失念することと要約できるが，本来抽象的なあり方にとどまるものであるから，しばしば具体的・形象的に肉体の病気によって類比される。そのような類比に基づく表象がこの小説を覆っている。小説の冒頭，最後の審判間際の世界は「不思議な病気」の流行をもって特徴づけられる。小説中盤，ケルンで主人公ジンプリチウスは医学を学び，世俗の悪徳一切を病気として診断を下している（癇癪，妬み，賽ころ，暴飲暴食，思い上がり，笑い，好奇心，怠惰，復讐心，嫉妬，不謹慎，情熱，吝嗇）(Ⅲ－23)。そして続編の終章ではジンプリチウスは彼自身の到達した教養状態を，

島に流れついた病気の船員を医師として治療することで，証示する（Ⅳ－26）。これは，彼が遍歴の途中で偽の医師として振る舞うことと対応していて（Ⅳ－9），救いがたい罰当たりの境涯から最終的に神的境域に彼が到達したことを示している。冒頭における医学に関する主人公の無知は，彼がいまだ世界にあふれる種々雑多な病原菌から無縁の，言わば無知の無菌状態に守られていることを示している。やがて主人公はこの無菌状態から世界のうちに出立し，様々な病気を自らを実験台としてくぐり抜けることになるのである。実はジンプリチウスという表題主人公の名前は，その文字通りの意味，ラテン語 simplex（単純）の比較級の意味以外に，作品成立当時，「薬草」という意味を持っていた。[(1)] ハーナウ要塞における一場面では次のような冗談めかした問答のうちに秘められた教化的意図が種明かしされている：

Mich aber fragte er, wie ich hieβe? und als ich antwortet:
"Simplicius", sagte er: "Ja ja, du bist eben des rechten Krauts!" (I-20)

しかし彼は私に何という名前かと尋ねたので，私が「ジンプリチウス」と答えると，彼は言った，「ああ，ああ，お前はまさしく薬草だ！」

表題主人公の名前は，こうしてあらかじめ，この小説が読者を導こうとする神学的目的地を暗示していることになる。世界は病である。この小説は，世界のうちにあることによって病んでいる人々を，薬草の効能をもって治癒しようというのである。

2．書物との出会い

主人公は戦火によって家を追われ，森の中を彷徨する。彼はそこで，後に実の父親であることが判明することになる一人の隠者と出会う。この出会いは，やがて主人公に世界および自己を批判する根拠・基準を与えることになるのだが，それは同時に彼にとって書物との出会いでもある。その際彼はヨブ記の木版画人物像を現実の人間と取り違えるというとんちんかんを演じている：

....und ob ich zwar nichts vom Lesen und Schreiben gewuβt, so merkte ich doch an seinen Augen, daβ ers mit etwas in selbigem Buch zu tun hatte: Ich

gab Achtungauf das Buch, und nachdem er solches beigelegt, machte ich mich dahinter, schlugs auf, und bekam im ersten Griff das erste Kapital des Hiobs, und die davorstehende Figur, so ein feiner Holzschnitt und schnöilluminiert war, in die Augen; ich fragte dieselbigen Bilder seltsame Sachen, weil mir aber keine Antwort widerfahren wollte, ... (I-10)

私はなるほど読み書きについて何も知らなかったが，彼の目の様子で彼がこの本に何か関係をもっていることを察した。彼はその本に注意を払い，彼がそれを傍らに置いた後で，近寄って開いてみるとヨブ記の第1章であった。繊細な木版画できれいに彩色されている登場人物が目に入った。私はその人物に奇妙な質問をしたが，誰も答えようとはしなかったので，

ここで主人公は書物の中の登場人物を現実の人物と取り違えている。この小説にはこの種の取り違えが散りばめられている。例えば，後で登場する自分を神ユーピテルと思い込んでいる狂人については次のような説明が与えられている。

...., wurde aber bald inne, daβ ich anstatt eines Fürsten einen Phantasten gefangen hätte, der sich überstudiert und in der Poeterei gewaltig verstiegen, denn da er bei mir ein wenig erwarmte, gab er sich für den Gott Jupiter aus. (III-3)

しかし間もなく，彼が捕らえたのは殿様ではなくて，勉強のし過ぎで詩に没頭してしまった夢想家であることがわかった。というのも彼は私のところで少し暖まると，自分は神ユーピテルであると主張しだしたからである。

先の例は，書物というものを知らないことから生じた取り違えであったのに対して，ここの例は，書物の読みすぎによる取り違えである。作者は，想像力の所産と現実との間の境界を曖昧にし，人間を「夢想家」つまりは狂人としてしまう，ドン・キホーテ的な「詩」の魔力について十分認識している。さらには，緑の猟人時代，主人公は牧師と次のような会話を交わしている：

...., und kam daraufhin ihn zu besuchen, als er eben in meinem "Joseph" las, welchen ihm mein Wirt ohne mein Wissen geliehen hatte: ich entfärbte mich, daβ einem solchen gelehrten Mann meine Arbeit in die Hände kommen sollte, sonderlich weil man dafürhält, daβ einer am besten aus seinen

Schriften erkannt werde; er aber machte mich zu sich setzen, und lobte zwar meine Invention, schalt aber, daβ idh mich so lang in der Seliche (die Potiphars Weib gewesen) Liebeshändeln hätte angehalten; "Wessen das Herz voll ist, gehet der Mund über", sagte er ferners; "wenn der Herr nicht selb sten wüβte wie einem Buhler ums Herz ist, so hätte er dieses Weibs Passiones nicht so wohl ausführen oder vor Augen stellen können." Ich antwortet, was ich geschrieben hätte, das wäre mein eigene Erfindung nicht, sondern hätte es aus andern Bü chern extrahietr, mich um etwas im Schreiben zu ü ben."Ja ja", antwortet'er, "das glaube ich gern (scil.), aber Er versichere sich, daβich mehr von Ihm weiβ, als Er sich einbildet!" Ich erschrak, da ich diese Worte hörte, und gedachtete: "Hat dirs denn St. Velten gesagt?" (III-19)

そのあとで彼を訪問すると，彼はちょうど私の『ヨセフ』を読んでいた。私の家主が私に知らせずに彼に貸したのであった。私の作品がそのような学識ある人物の手にとられていることで私は顔を赤らめた。とりわけ，人はその著作によって最もよく知られると見做されていたからである。しかし彼は私を自分のかたわらに座らせ，なるほど私の工夫を誉めてくれはしたものの，私が（ポティファルの妻であった）セリヒェの情事を長々と扱っていることを非難した。「思い内に在れば色外に現れるといいます」と彼はさらに言った，「あなたが，漁色家の気持ちがどんなものか自分自身知っていなかったら，この妻の情念をこうも上手に描き，あるいは目の当りにさせることは出来なかったでしょう」。私は，私の書いたことは私自身の発案ではなく，書くことの練習のために他人の著書から借用したのだと答えた。「ええ，ええ」と彼は答えた，「そうでしょうとも，しかし私はあなたが思っている以上にあなたについては知っているんですよ」。私はこの言葉を聞いてびっくりして考えた「悪魔が知らせたんだろうか」。

牧師は，作品中の不品行を作者の現実の体験であると考え，その想定を表明することで，猟人時代のジンプリチウスの無軌道な生活を諌めようとしているのである。これに対するジンプリチウスの返答は，一見，彼自身の作品の成立過程を説明するものと見えて，その背後には「おれがどんな生活をしようが，この牧師に

何の関係がある」という本音を潜めている。『ヨセフ』が実際，グリンメルスハウゼンの実在する作品であることを考慮するならば，彼がこの対話で，書物の中に読まれた出来事と現実の出来事を取り違える可能的読者をからかっているのがわかる。[(2)] 虚構小説に対する道徳的試弾は往々にして，小説内の世界の自立性を受け入れず，虚構を現実と取り違える読者の素朴な態度に基づいている。グリンメルスハウゼンは，そのような素朴な読者の代表として牧師をここに描き込むことで，読者を挑発しているのである。

ジンプリチウスのヨブ記における書物との出会い，ユーピテルの発狂の由来，『ヨセフ』についての牧師との会話は，それぞれの仕方で，書物のなかで読まれた出来事と現実の出来事との取り違えを問題にしているということができる。最初の場合はジンプリチウス自身がそのような取り違えをなす当人であり，第二の場合はそうした取り違えの冷静な観察者であり，第三の場合は，そのような取り違えに基づく道徳的試弾にさらされる恐れのある作者グリンメルスハウゼンの代弁者である。こうして，この作品のうちではあちらこちらで読者に対し，そうした取り違え，言うなれば書物のもつ不思議な魔力について注意が喚起されているのである。

3．人文主義的な学問の礼賛

ジンプリチウスは隠者のもとで「キリスト教徒として知っていなくてはならないこと」を習得する。彼は自らの学習の成果を自画自賛して，古代の偉人の言葉を引き合いに出している：

Ich habe seithero der Sach vielmal nachgedacht, und befunden, daβ Aristoteies lib. 3. de Anima wohl geschlossen, als er die Seele eines Menschen einer leeren ohnbeschriebene Tafel verglichen, darauf man allerhand notieren könne, und daβ solches alles darum von dem höchsten Schöpfer geschehen sei, damit solche glatte Tafel durch fleiβige Impression und Übung gezeichnet, und zur Vollkommenheit und Prtfection gebracht werde; dahero denn auch sein Commentator Avettoes lib. 2. de Anima (da der Philosophus sagt, der

Intellectus sei alls potentia, weder aber nichts in actum gebracht, als durch die scientiam, das ist, es sei des Menschen Verstand allerdings fähig, könne aber nicht ohne fleiβige Übung hineingebracht werden) diesen klaren Ausschlag gibt : nämlich, es sei diese scientia oder Übung die Perfection der Seelen, welche für sich selbst überall nichts an sich hade ; solches bestätigt Cicero lib. 2. Tuscul. guaest., welcher die Seel des Menschen ohne Lehr, Wissenschaft und Übung einem solchen Feld vergleicht, das zwar von Natur fruchtbar sei, aber wenn man es nicht daue und besame gleichwohl keine Frucht bringe. (I-9)

以来，このことをたびたび反省してみて，アリストテレスが『霊魂論』第3巻で，人間の魂を，その上に何でも書くことができる何も書かれていない白紙にたとえ，そのような白紙が絶えざる印象と練磨によって刻み込まれ，完全完璧なものへともたらされるようにと，そうした一切は造物主によって作られていると考えたことはまことに正鵠を得ていると思った。従って彼の注釈者であるアヴェロエスもまた『霊魂論』第2巻で（この哲学者は，知性は可能態であるが，学問によらなければ現実態にはもたらされない，つまり人間の悟性は万能であるが，絶えざる練磨なくしては何ものももたらさないと言っている）学問と練磨こそが魂の完成であり，魂それ自体は何ものでもないと断じている。このことをキケロは『トスクラーヌムの討論』第2巻で確認していて，彼は学習，学問や練磨を伴わない人間の魂を，なるほど生来は実りをもたらし得るものであっても，耕されず種も蒔かれないので，実りをもたらさない畑に比べている。

このような博識の提示はそれ自体，主人公の「学習」の成果を誇示するものである。実際，主人公は小説の展開のうちで，人文主義的伝統に基づくものである「絶えざる学習」を実践している。先に見た書物との出会いの後，遍歴の過程で彼は熱烈な読書欲を示すのである。ハーナウ要塞では彼は牧師の蔵書を「隠者に負けずに一冊残らず」読んでしまう（Ⅱ－13)。ゾーストの猟人としても彼は「大学生のように読書三昧」の生活を送っている（Ⅲ－17)。第5巻の正編の結末近くで彼は自らの読書経験を総括しているが，これは冒頭の絶対的無知の宣言に

対応するものである：

Nach meiner Heimkunft hielt ich mich gar eingezogen, mein größte Freude und Ergötzung war, hinter den Büchern zu sitzen, deren ich mir denn viel beischaffte, die von allerhand Sachen traktierten, sonderlich solche, die ein' großen Nachsinnens bedurften; das was die Grammatici und Schulfüchse wissen müßten, war mir bald erleidet, und also wurde ich der Arithmeticae auch gleich überdrüssig, was aber die Musicam anbelangt, haßte ich dieselbe vorlängst wie die Pest, wie ich denn meine Laute zu tausend Stücken schimß: die Mathematica und Geometria fand noch Platz dei mir, sobald ich aber von diesen ein wenig zu der Astronomia geleitet wurde, gab ich ihnen auch Feierabend und hing dieser samt der Astrologia ein Zeitlang an, welche mich denn trefflich delektierten, endlich kamen sie mir auch falsch und ungewißvor, also daßich mich auch nicht länger mit ihnen schleppen mochte, sondern griff nach der "Kunst" Raimundi Lulli, fand aber viel Geschrei und wenig Wollen, und weil ich sie für eine Topicam hielt, ließich sie fahren und machte mich hinter die Cabbalam der Hebräer und Hieroplyphicas der Ägypter, fand aber die allerletzte und aus allem meinen Künsten und Wissenschaften, daß kein besser Kunst sei, als die Theologia, wenn man vermittelst derselbigen Gott liebet und ihm dienet! (V-19)

帰ってからは引き籠もって暮らし，調達した書物の山に埋もれて過ごすのが私の最大の喜びとも楽しみともなった。それらの書物はあらゆることがらを扱っていたが，とりわけ頭をしぼるものが多かった。文法家やうるさ方が知っていなくてはならないことはすぐに嫌気がさし，算術にもすぐにあきあきした。音楽に関しては，ずっと前からペストのように嫌いになり，リュートは木端微塵に砕いてしまった。数学と幾何にはなおも幾分の興味をもっていたが，間もなくそれらによって天文学へと導かれると，それもお払い箱にし，しばらくは天文学と占星術に愛情を注ぎ，それが大いに私を楽しませてくれたものの，結局のところ偽りとも不確かなものとも感じられるようになり，長くはそこに留まらず，ライムンドス・ルルスの術に手を出したが，こけ脅しな

ものであることがわかり，雄弁術のようなものと思われたので，これは捨ててヘブライ人のカバラとエジプト人の象形文字に関心を移したが，しかし最終的にあらゆる技芸，学問のうちで神学ほどすぐれたものはないことがわかった。そのおかげでわれわれは神を愛し，神に仕えることができるのだ！

この小説は全体として，知識すなわちジンプリチウスの，ひいては作者グリンメルスハウゼン自身の学習の成果の目録の観がある。古代の著名な牧童について（Ⅰ－2），古代の支配者の低い出自について（Ⅰ－17），神話的人物の敵対について（Ⅰ－28），記憶力について（Ⅱ－8），形象および貴族の照合について（Ⅱ－10），著名な人物の欠点および妬みについて（Ⅱ－11），古代の女神の愛人について（Ⅲ－18），古代の人物が愛読した書物について（Ⅳ－12），不思議な泉について（Ⅵ－14）などなど，あれこれの博学の提示は，ジンプリチウスの世界遍歴の包括性を学識の上で証示しつつも，見たところストーリーの展開のうちで物語上の必然性なく持ち出されている。そうした提示はそれ自体がほとんど自己目的となっているとすら言える。[3] バロックは，人文主義の頽落形態とも見做せる文学的博識趣味が全盛を誇った時代であった。17世紀において古典古代の文学は文学者にとって詩学上の模範であるばかりか，引用のための貯蔵庫であった。そこではロマン主義以後の文学理念においては決定的な役割を占めることになるオリジナリティーということはほとんど問題とならず，ためにする引用をもっていかに巧みに文章・詩句を織り上げるかが問題であった。文学は天才の所産では決してなく教養の所産であった。古代の著作家についての知識なくしては創作は不可能であり，引用のための知識財を提供するための簡便な文例集や便覧が多数出回っていた。引用はそこではほとんど自己目的と化し，同時代の多くの著作家は競ってほとんど義務のように膨大な古典からの引用句を挙示してみせていたのである。『ジンプリチシムス』における主人公その他の登場人物の口を通して提示される博識の誇示は，そうした義務を，独学者であった作者グリンメルスハウゼンも忠実に遂行していることを示している。グリンメルスハウゼンは，無知の最たるものジンプリチウスを主人公とする小説において，そして当時においてはいまだ規範的な文学とは見做されていなかった小説において，逆説的に学識ある詩人として認知されることを要求しているということが出来る。

4．キリスト教の学識の蔑視

しかしながら同時に見過ごしに出来ないのは，そのような学識の誇示すなわち博学趣味に対する明示的暗示的な批判もまたこの小説を一貫するものであることである。学識一般に対する批判が最も明瞭に認められるのは，ハーナウ要塞における貴族の称号についての議論である。ジンプリチウスはそこで司令官付きの秘書と対決する。「学校を出たばかりで，学校で覚えた学問が頭にいっぱい詰まっていて，そのためときどき脳味噌が少し不足しているか詰まりすぎているのではないかと思われた」とされる秘書は，この時点で「美点と言えば，汚れていない良心と純真な敬虔の気持ちの二つだけであった」とされるジンプリチウスと好対照をなす軽薄才子として描かれている。秘書はインキ壺の効用について次のように語る：

....solches (=Tintenfaβ) sei sein bestes Stück in der ganzen Kanzlei, denn aus demselben lange er heraus was er begehre, die schönsten Dukaten, Kleider, und in Summa was er vermöchte, hätte er nach und nach herausgefischt: .... solches vermög der Spiritus Papyri (also nennet er die Tinten) und das Tintenfaβ würde darum ein Faβgenennet, weil es groβe Sachen fasse: .... er hätte einen Arm im Kopf, der solche Arbeit verrichten müsse, er verhoffe sich bald auch ein schöne reiche Jungfrau herauszulangen, und wenn er das Glück hätte, so getraute er auch eigen Land und Leut herauszubringen, welches wohl ehemals geschehen wäre: .... (I-27)

それ（インキ壺）は秘書室の中でも最高の品物だ，それというのも望みのものは何であれそこから取り出したのだ。すばらしい金貨，衣装，要するに自分の持っているものはすべて次々にそこから釣り上げたものだ……それは紙の精（そう彼は壺のことを読んだ）のおかげであって，大きな品物が入るからこそ，インキ壺は壺と呼ばれているのだ……自分の頭には，そうした仕事を引き受けてくれる腕が生えていて，そのうち美しくて金持ちの令嬢を釣り上げる当てがあるし，幸運に恵まれれば，領地や良民も取り出すことができるだろう，そうしたことはよくあることなのだ。

「そのような技術を身につけた」人物の例として，彼は「官房長，学者，秘書，代言人，弁護士，軍事委員，公証人，商人」を引き合いに出す。これらの人々は要するに，自らの学識をもってバロックの宮廷社会に寄生する精神的労働者である。これに対してジンプリチウスは「それなら，額に汗して働いてパンを食べ，こうした技術を覚えようとしないお百姓その他の勤勉な人たちは馬鹿者だということになりますね」と応ずる。彼はさらに「敬称便覧」（Titular-Buch）に象徴される階級社会批判を続ける：

Dieses alles sind ja Adamskinder, und eines Gemächts miteinender, und zwar nur von Staub und Aschen! Wo kommt dann ein so groβer Unterschied her? (Edenda)

このすべての人たちはアダムの子孫で，みな同じ被造物で，塵と灰から作られたんでしょう。どうしてこんなに大きな違いが生じたんでしょう。

16世紀のドイツ農民戦争やイギリスのジョン・ボウルの乱を思い起こさせるこの反問において「技術＝学芸」（Kunst）は，人間が何であるかを決定する，批判されるべき階級社会の本質的な構成要素とされている。ジンプリチウスが，ここで，学識から，従って宮廷社会から締め出されている民衆を代表することが出来るのは，まさしく彼が無知であるからである。ジンプリチウスはやがて司令官の宮廷道化師として秘書と議論を続行する。彼はそこで「英雄的行為」と「学芸」の意義を真っ向から否定する：

"Der herrlichen Heldentaten wären höchlich zu rühmen, wenn sie nicht mit anderer Menschen Untergang und Schaden vollbracht worden wären. Was ist das aber für ein Lob, welches mit so vielem unschuldig-vergossenem Menschenblut besudelt : und was ist das für ein Adel, der mit so vieler tausend anderer Menschen Verderben erobert und zuwegen gebracht worden ist? Die Künste betreffend, was sinds anders als lauter Vanitäten und Torheiten? Ja sie sind ebenso leer, eitel und unnütz als die Titel selbst, die einem von denselbigen zustehen möchten; denn entweder dienen sie zum Geiz oder zur Wollust oder Üppigkeit oder zum Verderben anderer Leut, wie denn die schrecklichen Dinger auch sind, die ich neulich auf den halben Wagen sah; so

könnte man der Druckerei und Schriften auch wohl entbehren, nach Ausspruch und Meinung jenes heiligen Manns, welcher dafür hielt, die ganze weite Welt sei ihm Buchs genug, die Wunder seines Schöpfer zu betrachten und die göttliche Allmacht daraus zu erkennen." (II-10)

「輝かしい英雄的行為は，それが他の人々に没落と害悪をもたらさないならば大いに賛美すべきでしょう。しかし，多くの罪もなく流された人間の血によって汚された誉れとはどんな誉れでしょう。幾千の他の人間の没落によって獲得され成就された高貴さとはどんな高貴さでしょう。学芸に関しても，無価値な愚行以外の何ものでしょうか。実際，それは，それによって与えられることになる称号と同じく空虚で虚栄的で無価値です。それというのもそれは貪欲か肉欲か奢侈か他人の没落かにしか役立たないからで，私が最近大砲の砲火で見た恐るべきものと同断です。全世界は自分にとって，創造主の奇跡を観照し神の全能をそこから認識するための書物であると考えた聖人の考えからすれば，印刷術や文字などなくてもすむものでしょう。」

「英雄的行為」すなわち戦争における戦果と「学芸」がここで一緒話題にされているのは興味深い。同じく宮廷化された教養のあり方に激しい反発を示した18世紀フランスのルソーの『学問芸術論』を思い起こさせるこの厳しい糾弾において「学芸」は，戦争兵器と同断の「恐るべきもの」として断罪されるのである。

ここには学識蔑視のトポスを見ることが出来る。[(4)] このトポスは17世紀の説教・教化文学にはしばしば見出されるものだった。純粋な信仰を怜悧な悟性の上位におき，学識を敬虔な信仰に対する障害として敵視するキリスト教的伝統は使途パウロの「智者いづこにか在る，学者いづこにか在る，この世の論者いづこにか在る，神は世の智慧をして愚かならしめ給へるにあらずや。世は己の智慧をもて神を知らず」という言葉にまでさかのぼる。[(5)] アウグスティヌスもまた『告白』において次のように語る：

「肉の欲」はすべての感覚や快楽の楽しみのうちにあり，それに仕えるものはあなたから遠ざかって滅びさりますが，この欲のほかに魂のうちには，同じ身体の感覚によるものではあるけれど，しかし肉においてたのしむのではなく，肉をとおしてむなしくめずらしいことを経験したいという欲望がひそ

んでいて，それは認識とか学問とかいう美名をまとっています。これは知識欲のうちに存するものですが，諸感覚の中で認識という点で首位を占めるのは目ですから，聖書のなかでは「目の欲」と呼ばれているのです。[6]

そしてジンプリチウスも自ら知識欲すなわち好奇心について次のように語っている：

Nicht weniger merkte ich, daβ der Vorwitz auch eine Krankheit und sonderlich dem weiblichen Geschlecht schier angeboren sei; ist zwar gering anzusehen, aber in Wahrheit sehr gefährlich, maβen wir noch alle an unserer ersten Mntter Kuriosität zu däuen haben. (III-23)

さらに私は，好奇心というのも一つの病気であり，とりわけ女性にとってはほとんど天性のものであるということに気がつかないわけにはいかなかった。大したものではないと見做されがちであるが，実際には非常に危険なもので，それというのも私たちは誰もが私たちの最初の母親の好奇心を受け継いでいるからである。

5．楽観主義と悲観主義[7]

人文主義的伝統に基づく学問のすすめが熱心に語られ，その成果が具体的に自画自賛される一方で，学識の虚妄性が厳しく断罪される。『ジンプリチシムス』のうちには，究極的にはヨーロッパ世界におけるヘレニズムとヘブライズムとの内在的緊張に結びつくだろう，人間にとっての学識をめぐる楽観主義と悲観主義とが厳しく攻めぎあっている。一方は人間の努力をその成長や自己実現のための必須の過程として奨励するのに対して，他方は，それは傲慢をもたらしやすく，救済の障害となるものとして排斥する。ルターとエラスムスとの間に戦わされた自由意志論争が，グリンメルスハウゼンという個人の作品の内部でその遠い残響を響かせているようにも思われる。またバロックを特徴づけて，しばしば神と世界との和解しがたい相克ということが語られるが，その対立が学識の評価をめぐってここで顕在化していると言うことも出来るだろう。両者の，互いに対立する見解は，この作品において別個に切り離されて表現されているばかりではない。そ

れはむしろ非常にしばしば同時に同じ表現のうちに表されていて，独特の両義的な気分を醸し出している。例えば小説冒頭近く，本当から言えばまだ何も知らないはずのジンプリチウスが自身の学識を自慢げにひけらかす箇所：

damals gleichete ich wohl dem David, anβer daβjener, anstatt der Sackpfeife, nur eine Harfe hatte, welches kein schlimmer Anfang, sondern ein gut Omen für mich war, daβich noch mit der Zeit, wenn ich anders das Glück dazu hätte, ein weltberühmter Mann werden sollte ; denn von Anbeginn der Welt sind jeweils hohe Personen Hirten gewesen, wie denn vom Abel, Abraham, Isaak, Jakob, seinen Söhnen und Mose selbst in der H. Schsrft lesen, welcher zuvor seines Schwähers Schaf hüten muβte, ehe er Heerhührer und Legislator über 600000 Mann in Israel ward. Ja, möchte mir jemand vorwerfen, das waren heilige gottergebene Menschen, und keine Spessarter Baurenbuben, die von Gott nichts wuβten. Ich muβ gestehen, aber was hat meine damalige Unschuld dessen zu entgelten? (I-2)

当時の私はまるでダビデのようであった。彼は風笛でなく竪琴をたずさえていたという違いはあるにしてもであるが。そのことは悪い兆しではなく，私にとって，幸運に恵まれれば，世界に名だたる人物にもなろうという良き兆候であった。というのも，聖書のうちにアベル，アブラハム，イサク，ヤコブ，彼の息子それにモーゼについて読むように，世界の始まりから偉大な人物はいつでも牧童であったからである。モーゼは，イスラエルの60万の民の司令官にして立方者となる以前には，さしあたり舅の羊の番をしなくてはならなかったのだ。それは神を敬う聖なる人のことであって，神について何にも知らないシュッペサルトの百姓の小倅のことではないと言って私を非難する人があるかも知れない。それはそのとおりと認めざるをえないが，しかし私の当時の無垢を何が報いてくれようというのだ。

ここではまたしても書物の内側で読まれた出来事と現実との間の錯誤が提示されており，それが風刺のバネとなっていることは注意すべきであろう。意図的に，名声欲，および旧訳聖書の事績と現実の貧しい状況との間の際立った相違が戯画化され，虚栄的な宮廷社会に対する皮肉な批判をともなう滑稽の効果が狙われて

いる。[8] 引用箇所以後もるるとして続くことになる博識の提示を作者グリンメルスハウゼンの時代の博識趣味に対する迎合であるか，それともパロディーすることによる批判であるか一義的に決定することは出来ない。グリンメルスハウゼンはここで彼自身の学識を実証し，人文主義的な文学的流行に適応している。しかし同時に彼は，それを戯画化することによって，それを笑いとばしてもいるのである。学識批判が明示的には表現されている箇所ですら，まさにこの批判的発言そのものが意図的に，有機的連関なしに虚栄へと奉仕する過剰な知識財によって粉飾されて提示される。[9]『ジンプリチシムス』のうちでは，こうして，学識に対する楽観主義と悲観主義とが，言い換えれば時代の流行に対する適応と反発とが同時にアンビバレントな表現へともたらされているのである。

5．好奇心

そのようなアンビバレンツは，単に小説の個々の箇所に指摘できるばかりでなく，その全体構造のうちにも見出される。ジンプリチウスの遍歴は全体として，彼の好奇心にその由来を発していた：

> O blindes Bloch, du hase dieselbe verlassen, in Hoffnung, deinen schandlichen Begierden (die Welt zu sehen) genug zu tun. Aber nun schaue, indem du vermeinest, deine Augen zu weiden, muβt du in diesem gefährlichen irrgarten untergehen und verderben. (I-20)
>
> ああ，めくらのでくの坊め，おまえは（世界を見たいという）あさましい欲望を満足させようと期待して，あそこを去ったのだ。ところがどうだ，おまえの目を楽しませるはずが，この危険な迷路のなかでお陀仏してしまわなくてはならないのだ。

世界を見たいという欲望，すなわち好奇心は，この作品のなかでくりかえし，それ自体，空しく邪しまで呪うべきものとして断罪される。これはアウグスティヌスの指摘していた「目の欲」と別のものではない。しかし，どうだろう。彼の「（世界を見たいという）あさましい欲望」が主人公を誘惑することなく，彼が依然として隠者同様，世界を逃れて森の中にとどまっていたとしたら，この小説に

はその後のいかなる展開も存在しないことになってしまう。主人公の遍歴は彼のあさましい好奇心に依存している。しかし好奇心の否定は，物語の展開を否定することにつながるのである。こうしてこの小説は徹頭徹尾，好奇心に貫かれていることになる。好奇心をめぐる評価はアンビバレントなものたらざるを得ないのである。

注

Text: Vollständige Ausgabe. Nach den ersten Drucken des "Simplicissimus Teutsch" und der "Continuatio" von 1669 herausgegeben, mit Anmerkungen und einer Zeittafel versehen von Alfred Kelletat. Deutscher Taschenbuch Verlag. München 1981.

翻訳に際しては，関口存男訳（東西出版社，1949年）および望月市恵訳（岩波文庫，1953年）を大いに参照させていただいた。

(1) Gersch, Hubert : Geheimpoetik, Tübingen 1973, S. 74.
Scheuring, Herbert : Der alten Poeten schrecklich Einfäll und Wundergedichte, Frankfurt am Main, Berlin／New York 1991, S. 408.

(2) ジンプリチウスはこの小説のなかでグリンメルスハウゼンの実在する作品，"der Satyrische Pilgram"（II-1）と "die Histori vom keuschen Joseph"（III-19）に言及している。

(3) Scheuring. S. 39-104

(4) Edb.

(5) 新約聖書コレント人への前の書第一章20

(6) アウグスティヌス『告白』X. 35，山田晶訳「世界の名著」14，中央公論社，1968

(7) Vgl. ワインシュトック『ヒューマニズムの悲劇』樫山欽四郎・小西邦雄訳，創文社，1976
金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書，1977

(8) Spriewald によれば，この冒頭部分は同時代の牧人小説パロディーである。
Spriewald, Ingeborg : "Die Anwaltschaft für den Menschen bei Zesen und Grimmelshausen" in : Studien zur deutschen Literatur im 17. Jahrhundert, Berlin／Weimar 1984. S. 382-386.

(9) グリンメルスハウゼンは実際，当時の人文主義的学識のための便覧書，例えば Thomas Garzonus の "Piazza Universale" などを，彼の小説に学識を盛り込むた

めに，ほとんど逐語的に引用するほどに，盛んに利用している。

Böckmann, Paul: "Die Abwendung vom Elegantideal in Grimmelshausens Simplicissimus -Das Verhältnis zur humanistischen Bildungswelt" in: Der Simplicissimusdichter und sein Werk, hrsg. v. Günther Weydt, Darmstadt 1969, S. 211.

Weydt, Günther: Nachahmung und Schöpfung im Barock, Bern／München 1968, S. 20-43. Scheuring, S. 84-85.

（まつい　たかゆき　　独文Ｄ２）